



TITLE:

白頭山雜記

AUTHOR(S):

向山, 武男

CITATION:

向山, 武男. 白頭山雜記. 地球 1927, 7(1): 58-74

ISSUE DATE:

1927-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183211>

RIGHT:

白頭山雜記

向山武男

(一) はしがき

朝鮮で高い山と云へば直ぐ白頭山が出る。併し困難多い長の道中や、危険極まる猛獸馬賊のため此の登山は尋常のことではない。余輩在鮮十餘年、常に此峰に憧がれてゐたが本夏朝鮮教育會主催の登山團に加はり漸く宿望を達するを得た。幸にも登山前に朝鮮總督府地質調査所の川崎所長より白頭山に關する適切な講話があり、尙多年朝鮮の地質調査にたづさはられし山成理學士は一行を親しく實地に指導せられたから啓發された所甚だ多かつた。それで其節の見聞及び其後兩先生が朝鮮教育會雜誌に要領を發表せられしものを骨子とし更に和田博士や松田甲氏の記録をも取入れて茲に編み上げたのが此記事である。

參照地圖

機密に關するため此地方のものには地形の詳細を現はしたものが發表されて無い。

朝鮮總督府實測圖

五十萬分一 各道別地圖咸鏡南道

二十萬分一 地形圖白頭山 (コントロール無し)

五萬分一

地形圖、惠山鎮號の内惠山鎮、甫安所里、普天堡、胞胎里、三浦山神武城 (コントロール無し) 小白山 (コントロール無し) 白頭山號の内、白頭山 (コントロール無し) 圓池 (コントロール無し)

(二) 經過

鴨綠江岸最上流の都邑たる咸鏡南道惠山鎮を出發したのは大正十五年七月二十九日、絶頂を極めたのが八月三日、惠山鎮歸着は同七日である。時恰も北鮮の雨季に際し全行程半以上は降り叩かれた。

七月二十九日(雨、後曇)	惠山鎮——二四軒——普天堡(舍營自炊)
同 三十日(曇)	普天堡——三六軒——胞胎里(舍營自炊)
同 三十一日(雨)	胞胎里——一八軒——虛項嶺(露營)
八月一日(曇後雨)	虛項嶺——二〇軒——神武城(露營)
同 二日(雨)	神武城——一六軒——無頭峯(露營)
同 三日(雨)	無頭峯、白頭山頂往復——三三軒——(露營)
同 四日(晴)	無頭峯——三六軒——三池淵(露營)
同 五日(晴)	三池淵——二〇軒——胞胎里
同 六日(晴)	胞胎里————普天堡

白頭山四周略圖

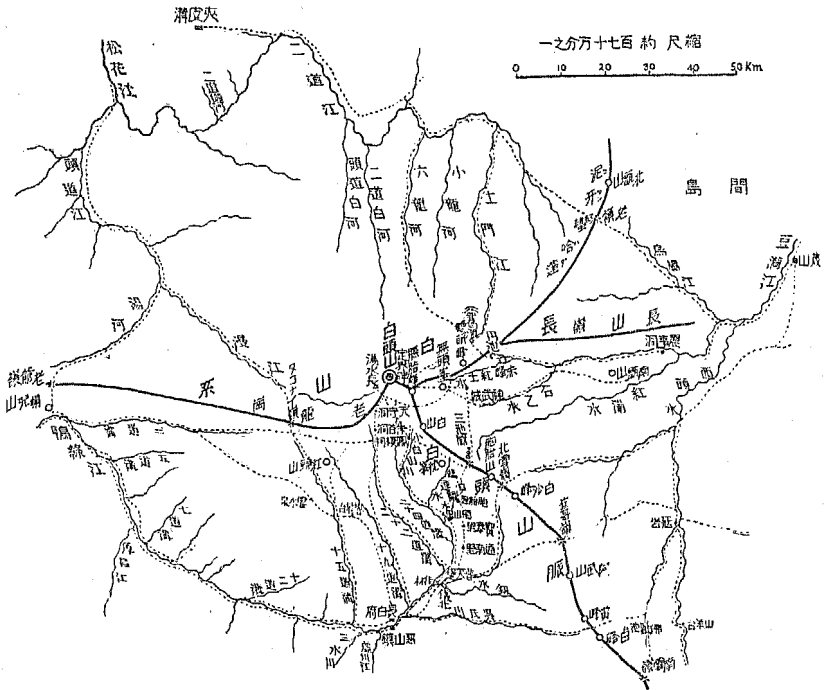
朝鮮總督府實測圖

支那側鴨綠江流域之雄圖

松花江流域之小博士及島嶼所出之圖

大正十五年九月 川崎繁太郎

白頭山雜記



同 七 日 (曇)

誓天堡——惠山鎮

(三) 蓋馬高臺

成鏡線俗厚驛より自動車で北行一時間、北青邑に着く更に南大川の谷を五十軒登り詰め名高い厚時嶺の急坂を曲りくれば海拔一三三九米の嶺上に達する。こゝが蓋馬高臺の南縁になる。いつぞや中村教授が本誌に書かれた赴戦嶺附近の地形は其儘此處に當て嵌まる。地形は時の兩側に於て極端の差を示して居る。之より北方へ二百基米の間に約六五〇米下れば鴨綠江畔の惠山鎮に行ける、道路が良いため自動車は北青から一日で樂に届く。

五九

五九

臺地上では俗名ツルチユクミ云ふ菩提の様な矮小の植物が紫色の大豆粒程の實をつけて一面に野生して居る處が時々見當る、その一箇で斯んな立札を見た、

一、地面 (咸鏡南道) 豊山郡安山面船像里

一、面積 四百四十一町五反二十六畝

一、年産額 約四百石

一、科名 石南科にして「クロマメノキ」

一、成分 ヴィタミンCを多量に含む

一、特徴 天然の美味と不老長生の飲料なり

酒、シヤム、乾果、何れに造ても美味の由。

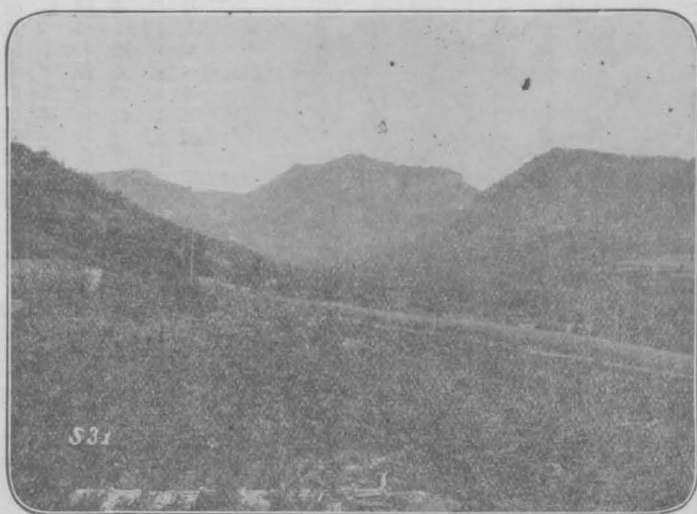
此邊農作物は氣候の關係上餘糧他と趣を異にし燕麥、馬鈴薯大部分を占め麻が少し出来る。豊山邑の宿屋での話に茄子や胡瓜を遙々北青あたりから運で来るのだと聞いて驚いた。馬鈴薯や、馬の喰ふ燕麥で人間が立派に生活して居る。ライスカレー(オートカレーと言つた方がよい)、馬鈴薯麵(薯の澱粉で造たそば)、燕麥餅薯酒燕麥飴等珍しい御馳走が多い人口少く草野が多いから蓋馬高臺の牧牛は朝鮮第一である。肉牛として元山や清津から内地に渡る數は夥しいと云ふ。又玄武岩の眞黒な土壤には赤兒の頭大の馬鈴薯が驚く程出来る立本を伐り山を焼拂て畑を作る彼の火田民は臺地を奥へ々々

と入て行く。古いものは定着して居るが、不安定の狀態で漂動して居るものも多い。火田民の處置は重大問題である。火田は殆ど全部未査定の國有林だから林野整理の結果、若し其耕作を認めないことになれば彼等は移轉の外はない。百五十萬の浮浪者を出すことは由々敷大事である。高臺上の地貌は標式的の老年期であるが豊山邑内の如きは約五十米の立派な段丘で圍まれ山腹には洪積世の河礫が無數に現れて居る。尙鴨綠江に近づくに従ひ各河川は何れも新に頭部浸蝕を起して谷を深め段丘を造て居る。高臺を北に進めば玄武岩の噴出漸く多く大小様々のメーサ(徳)が眼につく。惠山鎮の南東四軒の處に海拔九九五米の馬上嶺と云ふ峠がある。南から行けば緩勾配だが北方鴨綠江に向いた斜面は伸々急である。こゝに立て支那側を眺めた時、吾人は先づ其雄大な景觀に驚く。白頭山熔岩臺地の一部老龍崗の平臺は凸凹一つなき其面を東から西に果てしなく續かせて居る。彼の面と吾人が今立つ此の嶺上とは元來一と續きであつたもの、それを切隔てたのが遙か眼下を流るゝ彼の鴨綠江である。

(四) 惠山鎮より胞胎里まで

惠山鎮からは鴨綠江の峽谷を進むのであるが兩側の絕壁に

は種々の岩石より成る原地形の不規則な表面を玄武岩が綺麗に被覆し兩者の接觸面が赤く焼けて居る有様が生々しく見ら



第一圖 將軍峰

カルア岩の絶壁を現す。谷の兩側は玄武岩臺地。散點す
火の田作物は燕麥。

U字谷をなし、尙、各支谷をみると最近の隆起のため恰度Uの形、所謂谷中谷 (Canion) の状態を示して居る。
支那側の十九道溝と云ふ谷が其最も美事なものである。

本流と支流との浸蝕速度の差から小規模の懸谷 (Hanging Valley) をなして居るものをも、泉水の部 (チヨシムル) 落附近で二三見た。普天堡から寶泰里までの路は佳林川の支谷を溯るのであるが玄武岩臺地へ深く喰込んだ谷のこと故大きな壑濠の中を通る様な氣がする。兩壁を見上げるに見事な柱狀節理が發達して居る。寶泰里の谷の盡頭に素晴らしい絶壁面をこちらに向け、た一峰が見える。將軍峰と呼ぶ。山成學士はあれは確にアルカリ粗面岩だとして溪間を探される。果して該岩片が幾らでも存在する。

こゝから胞胎里まで二〇軒の間は南胞胎山から來た玄武岩の大フロアを横斷するのである、森林には焼木立が多い。

路は段々高くなる。來し方を振返れば谷々は隠れて玄武岩臺地の表面は海の如く南に擴がつて居る。

胞胎里は南胞胎山から來る谷で此處には花崗岩とアルカリ粗面岩の岩礫が多い、これから愈々人間界に離れるのである。

(五) 胞胎里より三池淵まで

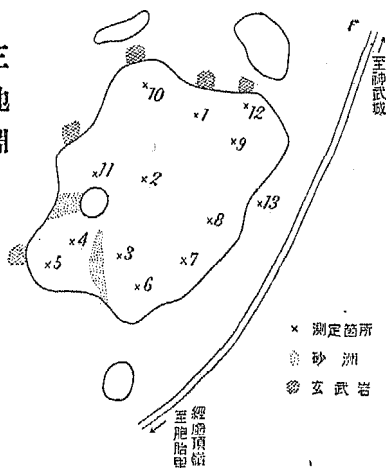
胞胎里から再び玄武岩臺地上の人となる。輕石層がそろそろ眼につく。森林は本式に繁茂し深山の氣が身にしみる。東から西への傾斜面を南から北へ横切るのであるから小さい溪水を數多く越えねばならぬ。晝尙暗い密林の地面は丈なす雜草に覆はれて窪地は何れも濕潤地を形成し、に白頭山名物の獐猛なるシベリア虬が横行するのである。林中を只管進めば

路はいつかはなしに海拔一四〇〇米の虛項嶺上に達する。白頭山、大臙脂峰、間白山、小白山、枕峰、虛項嶺及北胞胎山を連ねる「く」の字形の一線は鴨綠、豆滿兩江の分水界をなし、其以北は白頭山に直屬する眞の白頭山玄武岩臺地と云ふべく昔からの天坪と呼んで居る。

虛項嶺より北に僅か下れば三池淵がある。池は四つあるが南方より第二番目のもの最も大きく周圍二軒餘中に周圍約百米の島あり、底は細粒の輕石で岸に玄武岩の露出して居る所

が四箇所有る。地表が四箇所有る。地表流で之に注ぐもの及び之より流出するものは見當らない。水温及水深は山成學士が即製の筏に乗りて測定されたるもの左の通りである。北岸に露營の朝、水の中の方が温いと云て飛込で居た人があつたが一昨年の八月北海道に遊んだ節、洞爺湖で之と同じ様なこのあつたのを覚えて居る。兎に角水底

三池淵

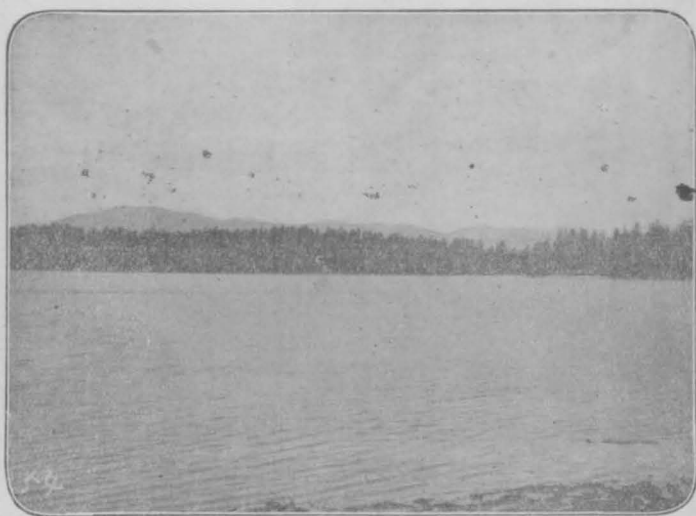


三池淵水温水深測定表

山成理學士

測定箇所番號	大氣の温度	湖面温度	湖底温度	水深	測定日時刻
1	15.5°C	21.°C	21.°C	5.尺	大正十五年八月五日上午九時
2	—	19.°	21.°	5.2	〃 〃 〃
3	—	21.°	21.°	5.	〃 〃 〃
4	—	22.°	22.°	5.2	〃 〃 午前十時
5	16.°	22.°	22.°	7.3	〃 〃 〃
6	—	21.°	21.°	5.1	〃 〃 〃
7	—	21.°	21.°	4.5	〃 〃 〃
8	—	21.°	21.°	4.1	〃 〃 〃
9	—	21.°	21.°	5.1	〃 〃 〃
10	15.8	21.8	21.°	5.	〃 午後零時二十分
11	—	22.5	21.8	9.5	〃 〃 〃
12	14.°	19.5	20.°	3.	〃 午前六時
〃	22.°	21.°	—	—	〃 〃 七時
13	泉の温度4.°				

溫度攝氏二十二度さは珍しい。湖上には鴨類が遊いで居り、夕方には隣の小さい方の池で蛙が喧しく鳴く。湖の南には密林



第二圖 三池淵

微に姿を見せて居る。

(六) 三池淵より無頭峰まで

三池淵神武城間は平坦な明い森林中を行く。恐ろしき山火事のために密林は疎林となり、空林となり、時には荒涼たる焼木立の死林の中を一時間以上も過ぎることがある。地表の軽石は風のため面白い形に堆積して居る。或は家屋を包む土塀の如く或は細長い堤防の如く或は又緩斜面を風上に向けたバルハンや、紡錘狀の砂丘の如く場所によつて夫々異て居る。地圖に見える間三峰なども此紡錘形堆積の一で、あたりを抜くこと十米位のものである。玄武岩や軽石で覆はれた此の天坪の地に於ては地表流と云ふものが極めて少い。谷は屢々渡るが何れも涸谷で水を見ない。しかし時々流水を見る處があり、そこが登山者の野營場となり獵夫の根據地となるのである。神武城も其一で別に人間が居るわけではない。水温は何れのものも必ず攝氏四度で逆も手を入れて居られぬ。

こゝより無頭峰までは又大密林となる。一本の小徑を辿て行くに大小の倒木點々跡を絶たず大ハドル小ハドル歩行實に困難を極める。大正二年に登山の故和田雄治博士は之に就て次の如く書いて居られる。

一密林中に屢々遭遇するものは風害及び火災に罹りたる林木

なり。風害は主として冬季降雪の際に起るもの、如く顛倒の方向は會々偏北風の強烈なるを示すのみならず、巨木の尖端



第三圖 天坪枯林

火山事跡の斯くは林相を全一變せむ

も亦南方に傾曲せるもの多しとす。然れども風害をして著しく甚大ならしむるは地質も亦大に與て力あるが如し。前述の

如く地盤は悉く玄武岩なるを以て縦根は深さ三四尺以上に達せずして、獨り横根のみ三十餘尺に延長するが故に冬季樹枝に積雪し、加ふるに烈風を以てすれば忽ち顛倒すること明白にして此方面の樹木は樹齡を全ふせずして遂に顛倒枯死するに至るものなり。尙博士は山火事の源因は雷火ではなく、入山者の火の不始末の結果ださされて居る。

無頭峰に近づけば密林漸く疎となり樹木は烈風のため上に延び得ずして横に枝を張り雅趣愛すべきものがある。

此のあたり熔岩面と覺しき草場を注意して視ると、大なるは人身を没し、小なるは片足を入るゝ位の底知れぬシンクホール(Sink Hole)が無數に散在し危險此上ない。

無頭峰でテントを張るべく地を掘ると輕石層の中からアルカリ粗面岩の焼けた小塊が澤山出て來るのを見る。雨後の溪水は一吋變つて居る。輕石以外に土砂を見ぬから濁ることはないが輕石の細粒を流すため飲むことも米を研ぐこともならぬ。そこで之を濾取るため蚊帳地の袋が必要となる。無頭峰とはよく名づけてある。平い井鉢を伏せたやうで表面至てスムースなるため何處を絶頂とも目し難いのである。樹海の縁邊に位置して居るからよく人目を惹く。東に急斜面を向け西方は緩傾斜で後方の谷とは殆ど平坦の鞍部で續いて居る。之は恐らく大白頭に屬する一小側火山でそれへ後方の谷からの玄武岩の大フロアが乗り掛り更に其上を輕石が被覆したものだらう。

「白頭山の山貌を明白に仰見し得るは東方山麓の無頭峰附

「近なり。此地より山形全體を窺ふに概して緩傾斜の三峰を呈し南方のもの最も低く、中央之に次ぎ北方に見ゆるもの最も



四角山頭白は景遠
無峰のラテルカ山頭白は景遠
りな壁周のラテルカ山頭白は景遠
む望を山頭白りよ峰頭無 圖四第
正大が峰高の目番二第りよ右 りな壁周のラテルカ山頭白は景遠
フ大のトルザバる溢りよ谷の側右の其峰脂臘小は方左景中。峰
。地限極の帶林森は景前。りれ掛り乘に峰頭無は一口

高きに似たり。其狀恰も淺間山を南方より望むが如し。蓋し山貌は元々圓鐘形なりしならんが數回の爆發によりて周壁飛

第五圖 大正峰の遠望



無頭峰より定界碑に行く間の景觀、此のフロアをだらだらと前方に下り行けば土門江の谷に出でそれを登り詰めれば定界碑に達す。即ち遠景中央より稍右の峰が大正峰で定界碑は其麓に當る。白きものは總て輕石なり。

散壞裂して今日の形態を呈するに至りしならん。溪間には、殘雪點々存すれども、其他白色を呈するものは悉く輕石なり。諸書四時白雪皚々たるを以て長白山又は白頭山の名ありと爲すは誤なり。」(和田博士)



第六圖 定界碑

大 清

シヨム(Abrasion)を受けて多孔狀を呈し、輕石は美麗なる連紋狀に排列して居る。谷側には輕石に覆はれて萬年雪がある、此谷を上り詰めてなだらかな輕石の丘を越え次の谷に移り水なき溪流に沿ふて上る。無頭峰から十二三軒の所で谷は盡きて大膽脂峰から白頭山へ續く低平な鞍部に出る。此處に有名なる定界碑が立て居る。碑石は淡黑色のアルカリ粗面岩で長方形をなし其頭部は兩隅を斷ち全長二尺六寸幅上八寸下一尺八寸あり、自然石の上に嵌め込み、其表面には次の如く刻つてある。

烏喇總管穆克登奉

旨查邊至此審視西爲鴨綠東

爲土門故於分水嶺上勒

石爲記

康熙五十一年五月十五日

筆帳式蘇爾昌通官二哥

朝鮮軍官李義復趙古相

差使官許樸朴道常

通官金應瀨金慶門

(七) 白頭山

之より路は玄武岩流で埋められた一溪谷を上るのである。がフロアの中央の高い部分は露出して居るが兩側は輕石に没して居る。猛烈なる白頭嵐のために玄武岩の表面はアゲレ

此處に立て山麓の方をみるに左方二百米位の所に石塊數十箇を疊積して方柱形をなしたものがあつた。尙、同様なものがある。様の間隔をおいて三四箇遙か向ふまで續いて居る。之は定界碑と共に建てた境界標である。無頭峰より定界碑に至る間、小い爆裂火口らしきものを附近の

山に屢々見る。山麓又は山腹に馬蹄形の窪みなし眞白な輕石で覆はれて居る。



第七圖 小臙脂峰を東麓より望む

遠景は白頭火口の壁の一部。中景は小臙脂峰の腹に爆裂した砂流の輕石及び玄武岩流の景。

定界碑から轉石磊々たる急坂を登ること約一時間で白頭火口壁中の最高點海拔二七四四米の大正峰頭に達する。生憎此日

風雨強く霧深く立ちこめて眺望全然不可能だったが幸に烈風の時々濃霧を吹き散するありて直下五百米天池の碧水だけは之を俯瞰することを得た。併し湖畔に水を掬するの樂みは遂に達せられずして止んだ。氣溫攝氏六度徘徊三十分にして定界碑に下る。夕刻無頭峰の野營地から西北を望めば憎らしや雲は峰を離れて居た。

白頭山頂の火口湖天池は最高二七四四米の火口壁で圍まれ水面は海拔二二五七米、火口壁の周圍十二軒ある。(臨時土地調査局實測)

天池に關しては元臨時土地調査局監査官松田甲氏の記事が面白い。(圖版第一版第一圖參照)

「白頭山上の大湖は、天池・大澤また龍王潭と稱せられ、眞に龍王の棲むかと思はるゝ靈異の境であり、雄壯の景である。而して太古の噴火口たるは言ふまでもない。其周圍二里三十町(最長徑三十五町)で、二百米内外もある斷崖絶壁より成れる殆ど四里の輪周に擁せられて居る。而して北岸の纔に拆けたる所を圍門と云ひ、それより湖水は流出して松花江の源をなしてある。湖邊に降る小徑は、唯、南岸の火口^{フルマキ}と稱する一箇所より外には無い。此れより降ると湖邊に多少開闊なる草地があつて、稔期には麋鹿や熊の歡樂場と爲つて居り其の他の岸は殆んど寸空の地面も無く、直ちに削れる如き斷崖絶壁をなしてある。徐命臂の文に「麋鹿成群。有飲者。有行者。有臥者。有走而禱禱者。玄熊二三緣壁上下。怪鳥一雙翩飛點水。若畫圖中見也。」とあるのは、此の火口附近の景を

能く寫したものである。單に机上にて一讀すれば、宛も嘘のやうに思はるゝが、之は全く僞りの無き實況である。予が登臨した時も二三の鹿の湖邊に遊んでゐたのを見た。殊に予等の深林に幕營中、惠山鎮守備隊の小卒大尉が二十餘名の兵士と共に登山して、九頭の鹿の一團を湖邊に射止めた珍事もある。元來、無頭峰より山頂までは、全面溶沙茫々として一白雪の如く、境界碑の處よりは全く一滴の水も無い。それがため、盛夏山頂附近を徘徊する獸類は、此の火頂より降て湖水を飲むを唯一の樂みと爲して居る。併し若し人ありて其の出口を塞がんか、彼等は進退維れ谷まりて忽ち死地に陥るのである。」

尙、川崎所長は天池下りの困難と、湖畔の廣きこと及び池水の温きことに關し次の如く引用して居られる。

「火口壁に佇立し眺むれば直徑一里餘も有らんがさ覺ゆる舊噴火孔の方に向ひ靜に水の動くを見る。暫くして道案内者の補助員湖畔に向ひ下り行けば二三の者を除く外衆皆之に隨ふ。磊々たる礫に足踏み込らして冷汗を出せしこと數知れず千辛萬苦の末汀に急ぎて汗に濡れたる顔を洗へば水は思ひしよりも温かなり。掬して味へば無味なること蒸餾水の如し。即ち休みて火口壁に引歸へす。」(古海正福學士)

「天池は眼下指呼の間にあつた筈のものが降りて見ると仲々遠い。下に降りて見ればまだ水際までは沙原を歩いて五六丁はある。其沙原は岬の右かげである。(中略)天池の渚は凡て白沙にして水は清麗極りないけれども水の温度は此の邊の山

中に通有なる氷の如き冷たさのものでなく相當の温度を保有するものであつた。」(雜誌「朝鮮及滿洲」)

白頭山の成因に就いては山成學士は次の通り説かれた。

「未だ白頭火山脈の現出せざりし以前を推想せんに、此の附近は山らしき山とてなく、單に低平なる碗波狀に起伏して一面平かなる高臺なりき。唯々南方朝鮮側にあつて雪嶺の連峰は稍高くその巨軀を横へたり。」

此時に當つて今の成鏡南北兩道の境上に長大なる地割れを生じ。その裂罅を通じて、熔け岩即ち岩漿は地の底より湧然として噴出せり。

南なるは胞胎山より南雪嶺に至る約十里の火山帶を構成せり。北なるは御鏡餅の如く圓形に塊座して白頭山をなせり此の間に挟まれて小白山及び間白山噴起す。岩石は何れも殆ど同一にして珍しき種類のアルカリ粗面岩より成る。吾人は地球上に未だ斯かる大量の岩石よりなるアルカリ熔岩の火山脈を見ざるなり。

アルカリ岩石は大西洋の沿岸にのみ出づるものにして太平洋の沿岸諸國は之を缺くとした過去の學説はいつしか立ち消え、量の點よりせば朝鮮は世界一のアルカリ岩石國となりす。白頭山附近丈で物足りなく感ずる人あらば、目か吉州明川地方に轉すべし。そこには方二十里に及べる大きな親戚あり。更に不足を感じなば鬱陵島、濟州島に別荘あり。共にアルカリ岩石を産す。朝鮮は岩石に於ては世界に威張れる國にして白頭山はそれ等の大宗なり。白頭山を作れるアルカリ

白頭山生ひ立の圖

山成理學士原圖

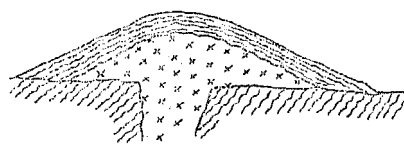
完

六九

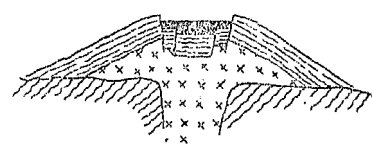
臺高馬蓋 (1)



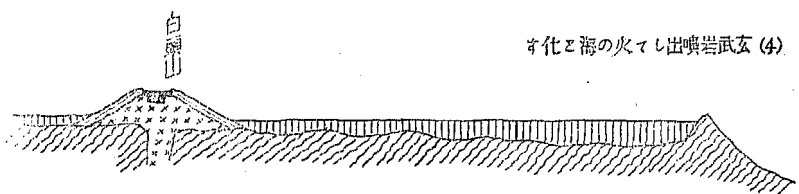
るたし出噴の形腐穹 (2)
岩面粗リカルア



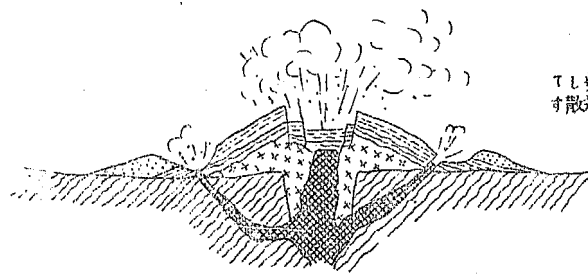
お生を地天てし落陷大中 (3)



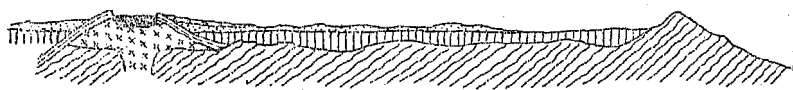
す化と海の火てし出噴岩武玄 (4)



てし噴爆池天 (5)
す散形を石煙



し粧化に色白れは裡に石煙は山頭白 (6)
すなを海林てつよに林留は野樫



類岩盤基	石煙黑	ルア状線流 岩面粗リカ	リカルア 岩面粗
地臺岩武玄	石煙	岩武玄	池

粗面岩は岩石學上珍品にして他に類例なし。強いて類縁を求むれば地中海の一孤島たるパンテレア島より産するパンテリア岩に近似す。余は研究の結果之を白頭岩と命名し彼のパンテリア岩と區別せし事あり。岩石を構成せる礦物は何れも珍しきもののみにして玻璃長石、エジル石、エジル輝石、曹閃石、三斜閃石など見出さる。」

山の形は岩石の種類によつて大に異なる。玄武岩の岩漿は水の様に流れ易くして平かなる火山平地を作り、粗面岩は飴の様に粘着性に富み固く膨らんで塊狀火山をなす。白頭山本体はアルカリ粗面岩よりなり形のよき塊狀火山としての代表物なり。但現今は陷落火口を生じて其性質を失ひ、穹窿形に膨み上つた熔岩の表面は寒冷なる大氣に觸れて、急激に固結しピール嶺の如き黒曜石の皮殻を生ぜり、内部は緩慢に冷却して粗目の粗面岩を作る。兩者の間には粗面岩と黒曜石の斑せる流紋狀粗面岩帶あり。斯くして生じたる塊狀火山は温度の遁下につれ、山全體として容積の縮小を來たし、特に圓頂部に當つて果然圓筒形の大陷沒を惹起せり。是今日見る天池の前身なり。(圖版第一版第二圖參照)

時過ぎて滿鮮の地は一樣に玄武岩の襲來を蒙り一面火の海と化せし事あり、白頭山、間白山、小白山、胞胎山などは恰も島の如く此の上に浮び裾野の大部は火の海の下底に沒せり。今日白頭山附近に見出さる、玄武岩臺地は斯くして生ぜり。その廣さ徑五十里以上に及べり。其後現れし噴火は局部局部に於ける玄武岩の小噴出にして、獨り白頭山頂下を上昇し來

りし高熱の玄武岩漿は天池より下る多量の水に邂逅して瓦斯となり輕石と化し、力盡きて遂に爆發し天池の湖底を破て天に冲せり。此時飛翔せしものは湖底を構成せる各種のアルカリ岩の破片、黒燒したる多孔質玄武岩、白色の玻璃質輕石などなり。輕石は其量最も多く朝鮮側にあつては胞胎里、三池淵などを越えて遙か遼隔の地にまで及べり、斯くして白色の輕石に覆はれたる白頭山の裾野も今は一面密林に包まれて山頂のみ長へに白し。

火山活動の餘燼として無かるべからざるものは溫泉であるが白頭山の南麓二里、鴨綠江源に近く硫黄泉の水溫華氏一四二度のものがあり、尙、松花江の水源附近にも高温度のもの一箇所あるらしいことである。

前にも述べた如く白頭山附近では水は必ず攝氏四度に近く冷くて手も入れられぬに拘らず三池淵や天池の水の意外に溫きこと、山麓に熱い溫泉の湧出すること、を考へる時一種の興味を禁じ得ないのである。

川崎所長は今回白頭火山脈なるものを發表された。

「○白頭山脈は一の火山脈なり。其方向は白頭山より南南東乃至南東に走り之を構成せる火山岩はアルカリ性の流紋岩又は粗面岩なり。而して第三紀後半より第四紀の前半に至る間に略大成せり。其後も多少爆發作用ありしもの、如し此火山脈を白頭火山脈と命名す。

白頭火山脈中の火山は概して其四近に玄武岩の噴出を伴ひ從ひて玄武岩臺地上に隆起し以て臺地の單調を破る。

白頭火山脈は白頭山、臙脂峰、小白山、胞胎山、白沙峰より南雪嶺に亘る其延長三十里、其れより南東方は連續不明なれども吉州郡七寶山附近に同岩石の熔岩流ありて日本海に臨む、尙、南々東方遙に鬱陵火山島あり、略同種の熔岩流より成る。或は白頭火山脈に屬するものなるべし。

白頭火山の火口壁を成せる火山岩は一種のアルカリ粗面岩にして山成學士は之に白頭岩なる新名を與へて之を發表せり白頭火山の骨格は花崗岩、上部糜尙層及び摩天嶺系を貫きて噴出せる白頭岩より成り其裾野に於ては其後噴出せる輕石層及玄武岩にて蔽はる。此の玄武岩は一時に噴流したるものにあらずして少くとも兩度に亘りて噴流したるものなり。這は其間に輕石層を挟めるを見て知るべし。(山成學士の新しき觀察に依る)

此の輕石及玄武岩は四近の玄武岩臺地を形成するものなり。而して白頭山の東方の臺地は天坪と稱せらる。輕石は山成學士に依れば玄武岩質のものありと。

白頭山以南に連亘し玄武岩臺地上に隆起せる諸峰はアルカリ粗面岩又はアルカリ流紋岩より成り白頭火山と其構造を等しくするは彌々山成學士の踏査に依り立證せられたり。

七寶山附近に於けるアルカリ岩石は其實白頭火山脈のそれと同じく熔岩流は緩向斜の古第三紀層又は花崗岩を水平に蔽ひ玄武岩にて蔽はる。故にアルカリ熔岩流は古第三紀後の噴流にかゝるものなり。而して之を蔽へる玄武岩は古第四紀に屬するものならんと推察せらるゝものなるが故にアルカリ岩石は恐らく新第三紀中か又は其終り頃のものならん。

鬱陵火山島に於ては其の下底は恐らく第三紀のものと考えらるゝ玄武岩にして之を被覆するにアルカリ熔岩流を以てす朝鮮半島の南方海中に聳ゆる濟州島は白頭火山と同じく其骨格はアルカリ岩石より成り新しき玄武岩流及火山岩層にて蔽はる。而して島の南海岸に於て玄武岩流が新第三紀を蔽ふ中村學士及横山博士に據る故にアルカリの岩石は新第三紀か又は之より古く玄武岩は第四紀のものならん。

如上の地質構造と時代との比較に依りアルカリ岩流は新第三紀之を蔽ふ玄武岩は第四紀後期のものなるを推察し得べし○白頭火山の北隣の地に噴火口を遺せる山丘の玄武岩臺地に隆起するものあるが如し。又露清間條約にて有名なる北滿の愛琿の南西方に當り有名なる熄火山あり。之等は白頭火山脈の延長線上にあり。

白頭火山脈の立てる玄武岩臺地は只に朝鮮内に止まらずして遠く滿洲寧古塔附近に亘るものなり。而して一九一三年より一九一五年に亘り此地を踏査する A. Sovetdy に依れば哈蟆河上流には火口七十餘を數へ得べしと云ふ。其火口の岩石不明なるを以て白頭火山の連續なるや否や明ならず。

尙、愛琿と齊齊哈爾間のメルゲンを中心として古來有名な烏雲和爾冬吉火山其他數多の火山あり。然れども其岩種を明にせず。之等の火山は Wassiljew に依りて一八五五年紹介せられたり。此の火山群は Suess 及 Richtofen に依れば興安山系の東側に沿へる火山脈に屬させらるゝも又白頭火山脈の北西方延長線上に在り。

(八) 國境問題

白頭山熔岩臺地上では河水は概ね、伏流をなして地下を走るからどの河も、尻切れか胴切れか或は首無しとなり首尾一貫したものが少いのである。こゝに於てか國境問題が起て来る。争は明治二十四年四月に溯る。此の紛糾せる境界を決定するべく清韓兩國の勘界使は會寧に相會したが初め清使は西頭水を固持し、次に紅湍水に、次に石乙水に譲歩した。一方韓國側は最初土門江を固持し、次に紅土水まで譲歩したが遂に石乙水までは譲らず、こゝに談判は破裂した。

越えて明治四十二年九月四日長らくの此の國境問題も北京に於て締結された日清協約に依て完結した。其第一條に「日清兩國政府は圖們江を清韓兩國の國境とし、江源地方に於ては定界碑を起點とし石乙水を以て兩國の境界と爲すことを聲明す。」とある。(豆滿江は豆漫、統門、圖門、圖們等とも書かる)

扱て、此の石乙水なるものが、前言ふ通りの次第で所在不明と來て居る。東亞同文會報告の地圖に依れば紅土水は圓池より發して居り、石乙水は飯山と北飯山の中間を流れるやうになつて居る。

間島産業調査書には石乙水は臘脂峰、虛項嶺、小白山の間を流れるやうに書いてある。

何れをとつて然るべきか迷はざるを得ない。之に對して和田博士は「神武城無頭峰間を經過する一溪谷あり。流水潤澤

にして圖們江の水源たるが如し」と述べられ川崎所長は清韓兩國使節讓歩の順序から見れば「石乙水は紅土水と紅湍水と間にあらざるべからず、即ち總督府實測圖に於ける上トランスに相當すべし。又、石乙水の朝鮮發音(石乙トリスル、乙水トリスル)も之に近かるべきを以て石乙水は即ち上トランスなるは蓋し誤なかるべし(無頭峰を土俗ムトロツ)と斷ぜられて居る。

五萬分地圖はコントル抜きで出て居るが之には國境は入れてない。石乙水より遙に北方に朝鮮領の部落名が記されてあることも解せない。

尙、注意すべきは定界碑に立つて見た時直ぐ其の西側を流れるせうらぎは鴨綠江源であるが、東側を下る水は土門江(松花江上流)に注いで居ることである。而して豆滿江なるものは遙に下の方の別の谷から出て居る。地圖には五萬にも二十萬にも然うなつて居る。さすれば定界碑面の「西爲鴨綠東爲土門、故於分水嶺上、勒石爲記」の土門は豆滿江のことではなくて、吾人が今迄考へて來た如く定界碑は鴨綠江と豆滿江との分水嶺上にあるのではない。

抑々定界碑なるものゝ意味が不得要領で、鴨綠土門の分水嶺を境界とすると云ふのが、鴨綠土門を境界とすると云ふのが判らない。若し後者だとすれば國境は現在よりも遙に北方へ出ることになる(鴨綠江の方は明瞭で、疑問の餘地がない)。

「定界碑に明記せる清韓を界する土門江は豆滿江の支那訛りなるや否やは即ち嘗て清韓國境問題の焦點たりしものなり。

然れども土門江の名の起りは中間流形急窄、土岸對立如レ門者、指レ之也。北興とありて豆滿江の名の起りと全く異れり。」



第八圖 定界碑附近の鴨綠江源地方を望む

○景中。○山火白小は方左。○山の臺高馬蓋はるゆ見に微方右景遠。
○意注にさき多の石輕と微特の蝕浸山火。○谷の江線鴨は景前

「白頭山に就て注意すべきは、名士の筆に成れる地理書にすら「白頭山は朝鮮第一の高山なり」と記せるもあれば、巷間の俗曲にも朝鮮で一番高いは白頭山などと謡つて居り、同山を以て朝鮮第一の高山なりと信する人も甚だ多いやうであるが、是れ全く誤りたるを知り置くべき事である。實際地勢よりすれば、朝鮮第一の高山と云ひたいのである。併し如何せん今より二百十五年前、即ち李朝肅宗三十八年(清國康熙五十二年)建立したる定界碑がある爲めに、此れより以外は朝鮮の地域ではない。而して世人が誤りて朝鮮第一と爲す白頭山の最高頂たる大正峰(又名兵使峰)は、海拔二七四四米(朝鮮總督府臨時土地調査局測定以下山高亦)と算せられてゐるが、其位置は定界碑より外方西北約一里に當り、即ち支那の地域である、故に朝鮮第一の高山と言ふ事は出来ぬのである。尤も白頭山と稱する廣汎なる境域の八九分は、悉皆朝鮮の方に屬し、全面は鬱蒼たる巨木の繁茂する無盡藏の寶庫であつて、其間には南胞胎山(二四三・五米)・大麟脂峰(二二六・〇米)・北胞胎山(二二八九米)・小白山(二二七四米)の如うな峻峰も尠なくないが、併し大正峰より低き事は勿論であつて、更に之を朝鮮に在る他の數箇の高山に比較して見る時は、猶更に低いのである。故に朝鮮第一の高山は、白頭山地帶中に無きことは明白と云つてよい。

冠帽山 { 咸鏡北道鏡城郡朱乙溫面
同 道茂山郡延社面

二五四一米

北水白山 { 咸鏡南道豐山郡熊耳面
咸鏡南道豐山郡熊耳面

二五二二米

遮日峰 { 同 道新興郡東上面

二五〇六米

(川崎所長)

(九朝鮮第一の高山)

白頭山雜記

頭雲峰〔咸鏡南道長津郡東下面
同 道豊山郡熊耳面

二四七六米

白山 咸鏡南道豊山郡熊耳面

二四四一米

朝鮮の高山の數箇を擧ぐれば、乃ち右の如くであつて、是に由り結局、冠帽山は朝鮮第一の高山なりと認めて、白頭山に非ずと斷定するを要し、朝鮮の地理を知らんとする人は、大にこれに注意せねばならぬ事となる。(中略)

併し叙上の如く、白頭山を朝鮮第一の高山なりと云はれぬにせよ、半島山系の起る所であり、殊に白頭山と稱する廣汎なる境域の八九分は悉く我が地に屬し、鴨綠豆滿の二大江は源を此に發する。險を冒して遠く之を探り、老樹の蔭に憩ふて猛獸のほゆるを聽き、萬里の山河を睨めて千古の英雄を懷ふのは、眞に名狀し難き痛快事である。(松田甲氏日鮮史話)

一〇白頭山地帯研究の必要

本文、徒に大家の記事を摘出するのみで排列一向要領を得ず且語り及ばざる所甚だ多きも詳細は之を他日に譲り今回は唯白頭山の如何なるものかの一端を御紹介するに止める。

白頭山地帯の研究は地文人文兩方面よりみて頗る興味あることなるが位置の僻遠と幾多の困難とは常に之を妨げ、頂上の天池の如きも湖沼學方面よりは全く手がつけられて居らず、火山學的に見たる白頭山もほんの一部丈しか紹介されて居ない。温泉や諸河川の位置、殊に支那側のそれに至ては全然グエールに包まれて居る。

但、植物方面就中森林の調査は遠がによく行届いてゐる様

に見受ける。

今や吉會鐵道も既に一部は工事に着手し、全線の開通も餘り遠い將來のことでもなくなつた今日、此地方の事情に一步先んじて着眼することは地理學に志すもの、務ではあるまい乎(終)

圖版第一版說明

第一圖 天地の排水口闊門の遠望

北に向て火口壁を流れ下る水は松花江の一支流二道白河となると云ふ。

第二圖 天地周壁の景

周壁上より湖面までは垂直距離五百米あり。

周壁を構成する岩石は白頭岩と呼ぶアルカリ粗面岩にして最上層は其黑曜石化せるもの、中層は流紋狀をなせるもの、下層のものが通常の白頭岩なり。テーラスは總て輕石なり。

「地球」だより

十二月二十五日より開催する豫定であつた第六回講習會は出席員の申込七十六名に達したが、大行天皇陛下の御不例によつて御遠慮の爲め延期することにした。申込諸氏は端書又は電報で二十日に通知を發した。適當な時機に第六回講習會を開く積りではあるが、まだ其の期日は確定して居らぬ。